

「私のイギリス留学体験記」

高校一年 M・A

「ああ、行きたくないな。留学中止になったりしないかなあ。」
不吉なことだが私は初め本気でそう思っていた。そう考えたり、言ったりしたところで、何かが変わるわけではない。それはわかっていたが、そう思わずにはいられないほど、私は大きな不安で押しつぶされそうだった。私とペアの友人はワクワクすると言っていたがそんな気持ちは一度もわかかなかった。なぜなら、私は旅行が好きではなく、尚且つ親元を離れたことが三日間しかなかったからだ。「親がいなくてもちゃんと生活できるかな。途中で帰りたくなったらどうしよう。ご飯食べられなかったらどうしよう。」そんなことを毎日思いながら時間が過ぎていった。

出発の日、学校に行く時間より少し早く家を出た。いつもの私からここで、緊張でお腹が痛くなったり、気持ちが悪くなったりするのだが、この日はなぜかすっきりした気分だった。行かなくてはない、という覚悟がついたのだろうか。いつもとは違うわくわくした気持ちもそこにあった。空港行きの電車は、周りにスーツケースを持っている人ばかりで、空港に近づくにつれ「これから留学なんだな。」と思わされドキドキするのが分かった。空港の待ち合わせ場所まで着くと友人がたくさんいて、不安な気持ちは吹っ飛んだ。そして、色々な検査を受け、私たちはイギリスへと旅立った。

ヒースロー空港に着くと、私は自分が今、どこにいるのか分からないような気分になった。半年ほど前に香港に行った時は、これほどの衝撃を受けなかった。アジアだからなのか、どこか安心感があった。しかし、イギリスはまるで違った。どう違うのか上手に言いあらわせないが、見えている景色が日本とは違った。すれ違う人はみな英語か知らない言語で話しており、まさに「異国の地」であり、

自分が周囲とは違い、取り残されたような浮いた存在のように感じた。すぐ近くには友人がいるのに、この孤独と不安はなんなのだろう。

ロンドン観光をし、バスに乗って研修地チェルトナムに向かった。ロンドンを離れ一時間ほどすると景色がぐんと変わった。周りは低い建物ばかりで、真緑の草原がずっと奥まで広がっている。私は今まで、イギリスといえば大都市ロンドンというイメージがあったが、静かで、穏やかなロンドンとは違った一面が見えてとてもほっとした。緑の多い景色に少し気持ちが癒され、自分を少し取り戻し始めた。学校では、ホストファミリーと対面した。私のホストファミリーは、メアリーとジョン。二人とも明るくて優しそうなおじいさん、おばあさんだった。学校から家までの道のりは車で十分ほどなのに、初日はとても長いように感じた。私もペアの子も緊張していて、車の中は無言だった。けれどメアリーは英語の教師であり、聞き取りやすい英語で気さくに話しかけてくれ、私たちは徐々に打ち解けられた。少しの意思疎通ができてわかったことは、自分の言いたいことや気持ちが相手に通じるとわかった時の強い安堵感だった。日本では、日本語で双方話すことが当たり前に行われており、自分の言ったことが相手に理解してもらえるかという不安は全く感じたことがなかったのだ。相手に自分を受け入れてもらえるという感覚は、こんなにも人を安心させるのだと気づいた。出発前の大きな不安は、自分が受け入れてもらえるのかという不安だったのだと気が付いた。日本では考えたことのない「コミュニケーション」という言葉の意味を改めて考え直した。相手を受け入れようとする、そして受け入れられたという相互の気持ちが大切なのだ。

メアリーもジョンもとても早く寝てしまうので、しっかりと話せるのは朝食時と、学校への往復の車だけだった。一度もつとコミュニケーションの時間を取らなくてとはと、一緒にゲームや折り紙をしようと誘ったが、

「私は年だからできないわ。」
と断られてしまった。でも、

「私たちがテレビを見ている部屋でやってもいいわよ。」
と言ってくれて、私たちはメアリーとジョンがテレビを見ている横
で、ゲームや折り紙をした。途中で話しかけてくれたり、お茶を入
れてくれたり、同じことを一緒にするわけではなかったけれど、一
緒に空間をともにするだけでも、多く会話することができた。私は
少しの勇気をだして声をかけて良かったなと思った。コミュニケー
ションとは、互いに対面して言葉を交すことのようにとらえていた
が、それぞれ別のことをしていても、少しの関心を払いつつ同じ空
間を共にすることでも成り立つものなのだと思った。コミュニケー
ションの始まりは、「相手へ関心を持つ」ことなのかもしれない。

ここまでイギリスで感じたコミュニケーションの本当の意味等につ
いて書いてきたが、ここからは私がイギリスに行って日本との違
いを感じた点について書きたい。

私が日本との違いを感じた点は二つある。一つ目は、食文化に関
してのことだ。食べるものは日本と大きく変わりはなく、洋食が多
いということであったが、決定的に違ったのは、食事の時に使うモ
ノだ。日本では基本、箸を使うが、イギリスではナイフとフォーク
を使う。当たり前のことだと思いかもしれないが、私にはこれが衝
撃だったのだ。イギリス人が箸を使わないということは何となく知
っていた。ではなぜこのことが衝撃だったのか。それはなぜ同じ人
間なのに片方は箸を使う文化の地で、一方はナイフやフォークを使
う文化の地に生まれたのかという疑問が浮かんでしまったからだ。
しかも食べるものはあまり変わりが無いのにだ。これはとても難し
く解けるような問題ではなく、言ってしまうえば運命ということにな
るのかもしれないが、私はそこに奇妙な不思議を感じた。

余談だが、イギリスでは右利きの人も左利きの人も同じように、右

手にナイフ、左手にフォークを持って食べるのだが私はいつも右手に箸を持っているので、慣れない左手を使うことには慣れるのが少々大変だった。

二つ目は建物の違いである。イギリスにある建物は古くから使われている建物が多いように思った。例えば、私の研修地チェルトナムでも最近作られた建物だと感じることはあまりなく、一般人の家も長く使っているという感じがした。日本はイギリスと比べ、建物はいつか取り壊すものという感覚が根強くあると思う。特に一軒家はよりそのイメージが強い。私の家の近所も取り壊している家がある。持ち主がいなくなってしまうのか、あるいは、建て直すのか、事情は詳しくわからないが、そんな家が多いことはたしかである。これは私の見解だが、イギリスでは日本より、新しいものに変えていくのではなく、古きよきものを大切に直しながら使うという意識が根付いていると思った。

最後になったが、留学を終え、この体験記を書いている私には少し後悔が残っている。それはもつとホストファミリーと話しておけばよかったということだ。

この留学の当初の目的は英語を学ぶということだけだと思っている。しかし、この留学はそれ以上に色々なことを学ばせてくれた。英語だけでなく、そもそもコミュニケーションとは何か、自分とは異なる文化の発見やそれを理解しようとするこの大切さもといったところだろうか。英語に関しては、それを使って少しはコミュニケーションを取れるようになったものの、英語を話すというレベルにはまだまだ達していないと痛感した。

また、今まで日本という小さな国の中でしか見ていなかったものを、日本から出ることによって違った景色で見ることができたし、新たな気づきを得ることができたと思う。

そして、今回見ず知らずの私たちを「受け入れる」という大きな

大きな気持ちで迎えてくれたホストファミリーに心から感謝したい。